

「低墳丘方形墓」小考

—用語の概念規定—

小池 寛

1 はじめに

現在、定型化した大型の前方後円墳の出現をもって古墳時代の始まりとする見解は、広義の解釈を前提とするならばおおむね一致していると考えてよい状況にある。しかし、具体的に特定の前方後円墳を指し示すことなく論議が進展したために、各研究者によってその認識に少なからず相違が生じる要因にもなっている。

前期の前方後円墳の成立には、長岡京市・向日市を中心とする乙訓地域のように弥生時代以来の在地勢力の自立的発展に伴い成立する一群と、山城町に所在する椿井大塚山古墳のように周辺に可耕地が狭小であるにもかかわらず成立する一群に分類することができる。特に後者は、在地勢力の自立的発展によって成立したとは考え難く、大和朝廷から派遣された人物と深く関連するものと解釈されている。それらが成立した経過には多くの相違点があるが、いずれにしても前方後円墳自体の存在は、当該地域とヤマト政権の強い結びつきを傍証するものと解釈されており、周辺地域の支配形態が確実に整備されていたことを示唆するものである。

このような状況の中、弥生時代の有力世帯層の中には、古墳時代に入り、前方後円墳を築造するまでに発展した集団もあったが、一方では大王権へ直接的に掌握されることなく、地域首長へ帰属する集団も存在した。後者の集団は、前方後円墳に代表される高塚を築造することは許されず、地域首長の規制によって伝統的な墓制である方形周溝墓の系譜を引く「低墳丘方形墓」を築造せざるを得なかったのである。

本稿では、この「低墳丘方形墓」の用語について研究史を総合的に解釈した上で、その被葬者像について南山城地域を中心に検討を加えることを目的としている。

2 「低墳丘方形墓」研究略史

「方形周溝墓」は、弥生時代の墓制を示す用語として広く認識されているが、その系譜を引く墓制が古墳時代にも存在することが知られるようになった。そのため用語の混乱をきたさぬように、古墳時代に築造された「方形周溝墓」を後述するように研究者ごとにネー

ミングを行い、その概念を規定しているのが研究の現況である。ここでは、その研究史と用語の概念の違いについて概観し、一定の整理を行いたい。

都出比呂志²は、「低墳丘古墳」と呼称し、古墳時代の階層構造の中での位置付けを行った。特に、「群集型式のみをみれば、弥生時代の加美遺跡のあり方と大きく変わらない」ことを指摘し、弥生時代の共同体から分離した首長層とより在地性の強い下位の小首長との差が生じ、階層差の進行が顕著になることを論じた。

寺沢薫³は、「方形区画墓」と呼称し、築造時期を3世紀末ないし4世紀初頭から7世紀前半までとした。また、ヤマト政権の軍事的編成に組み込まれなかった家長及び世帯層も存在した可能性を前提に、その集団の伝統的墓制として方形区画墓が存続したことを説明した。さらに、支配体系は、擬制的同族関係を前提としているものの、必ずしもピラミッド的に貫徹されてはいなかったとして、首長とその一族までは浸透したものの、一般家長層にまでは及ばなかったことを想定した。

細川修平⁴は、「古式小古墳」と呼称し、前期・中期・後期の段階設定を行い、築造時期を4世紀後半から6世紀中葉とした。特に、中期段階で古式小古墳が爆発的に増加する現象を造墓に対する規制の解除と造墓主体の成長という観点で解釈した。また、部族連合中枢—地域首長—集落首長—集落一般構成員の重層関係が成立していることを後期段階の類例で想定した。後期群集墳は墓域の贈与によって成立しているが、伝統的墓域を踏襲している点から勘案すると、「個別の古式小古墳は小レベル共同体の完全な個別墓にはいたっておらず、上部集団の規制」内での存在であったことを推論した。

長山雅一⁵は、「5世紀型群集墳」と呼称し、長原古墳群について具体的に検証した。その中で4世紀末に古墳が築造され、5世紀にはそれを中心に方墳主体の群集墳が築造されることを説明した。出土埴輪は古市古墳群のものと密接な関連があり、韓式系土器の出土から渡来系氏族が被葬者である可能性を指摘した。また、大陸の先端技術を有する有力世帯の家長等が、原初的官僚機構であるヤマト政権の政治的關係に組み込まれ、首長層と同一の地に葬られた可能性も指摘した。これによって大王家は先端技術者集団である彼らを掌握することによってその権力基盤をより強固なものにしたと想定した。

田中和弘⁶は、小古墳群を周辺に位置する古墳との関係から3類系に分類した。「併設型小古墳」は、同時期の大型前方後円墳に近接して築造された小古墳群を示し、計画的な配列と豪華な副葬品から被葬者間の特別な関連を想定した。「独立型小古墳」は、同時期の特定の大型前方後円墳には近接せず、独自の小墓域をもつものと考え、小古墳群内の個々の古墳が系譜関係を持たない特徴を指摘した。「系列型小古墳」は、時期的に併行する大型前方後円墳と近接し、各古墳が系譜関係にあることを論じた。「併設型小古墳」の被葬

者像を大型前方後円墳の被葬者である首長のもとで複雑・多様化した職務を分担した集団構成員と推定し、それより下位に位置付けられる集団が「独立型小古墳」の被葬者であると規定した。

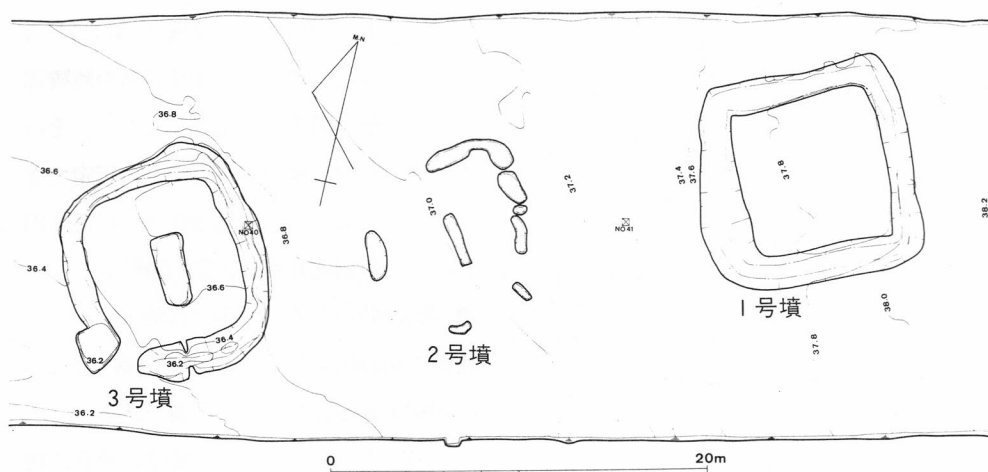
和田晴吾⁷は、南山城地域の古墳を編年する上で、古墳時代中期を中心として「小型低方墳」と呼称し、弥生時代以来の方形周溝墓の伝統を引く、有力な共同体成員とその家族が被葬者であることを推論した。

以上が「低墳丘方形墓」についての研究略史である。各研究者ごとに呼称が異なり、煩雑な印象を受けるが、各々の用語に対する概念規定が異なるために用語の統一を困難にしている。これらの研究略史を総合的に解釈し、「低墳丘方形墓」についての概念を次章でふれておきたい。

3 低墳丘方形墓の類例と用語の規定

京都府南山城地域で低墳丘方形墓が確認されている遺跡は、城陽市芝山遺跡、同宮の平遺跡、同芝ヶ原遺跡、木津町内田山古墳群、同上人ヶ平遺跡、八幡市狐谷横穴群の6遺跡である。ここでは、各遺跡の概要については割愛し、低墳丘方形墓が比較的良好な状態で確認されている木津町上人ヶ平遺跡⁸と城陽市芝山遺跡⁹(第1図)を中心に、その立地条件・群構成・墳丘・埋葬主体部・築造時期について概観しておきたい。

立地条件 低墳丘方形墓は、おもに丘陵部の遺跡に集中する傾向があり、河川によって形成された平野部には築造されないのが通例であると言えよう。その立地条件については、同時代の集落との関連を十分に考慮する必要があるが、伝統的な墓制を踏襲している点と



第1図 芝山遺跡低墳丘方形墓群実測図

前期の前方後円墳と同一の墓域内に築造される傾向が強いことから、単に立地条件のみで解釈できることではなく、低墳丘方形墓を築造した集団の社会的階層と深く関連するものである。

群構成 弥生時代の方形周溝墓と同じく単独で存在することはなく、群を成して築造されている。城陽市芝山遺跡のようにほぼ同規模で、主軸方向が一致する例や上人ヶ平遺跡のように上人ヶ平5号墳を核として隣接した箇所に築造される例がある。上人ヶ平遺跡の場合、一辺13m前後の一群、10m前後の一群、8m前後の一群に分類でき、時期が新しくなれば小型化が進む傾向が見られる。また、上人ヶ平遺跡では、5号墳を核とする群とは別な一群が形成されている。これらは、築造箇所は少し異なるものの、同一丘陵上に位置していることから同じ系譜を引くと考えてもよい。なお、芝山遺跡例と上人ヶ平遺跡例では、群構成に基本的な違いがあるが、これは各々の集団規模や共同体内における位置付けと深い関連があると解釈しておきたい。

墳丘 低墳丘方形墓と言う用語が示すように墳丘が低いことに特徴を見出しうるが、検出例の大半が後世の削平を受けているため、墳丘高を具体的な数字で表せないのが現状でもある。しかし、芝山遺跡3号墳の場合、大阪層群を基層とする地山に周溝と埋葬主体部の一部が残存し、主体部から良好な状態で須恵器を検出していることから、周溝掘削によって生じた土量で形成できる程度の墳丘であった可能性が高い。また、上人ヶ平7号墳は、旧地表上で行われた野焼きによって堆積した炭層より上位に墳丘盛土が60cm以上残存しており、また、埋葬主体部もほぼ完存していることから、推定の域を脱しないが1m前後の墳高であったと考えられる。

墳形については伝統的な方形周溝墓を踏襲していることから原則的に方形と考えるが、



第2図 岸和田市下池田遺跡円形周溝墓実測図(注10より転載)

大阪府岸和田市下池田遺跡(第2図)では、弥生時代中期末から後期初頭の陸橋部を持つ円形周溝墓が確認されており、その系譜を引く円形墓の存在も完全に否定できない状況であろう。古墳時代の「低墳丘円形墓」の類例としては、芝山遺跡6・7号墳(第3図)がある。埋葬主体部が完存する直径7mの円形墓であり、陶邑編年TK10に比定できる資料として重要である。

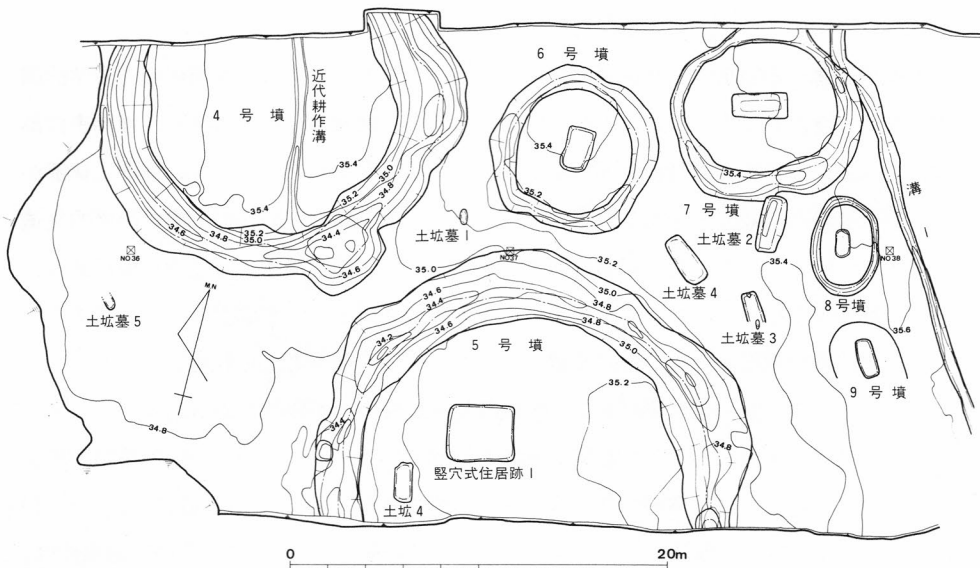
周溝は墳丘上部が削平を受けた場合、周溝幅・深さについての実数は不明となる

が、上人ヶ平8号墳のように墳丘の大半が残存する例から見れば幅3m・深さ60cmで、墳丘一辺の長さは周溝の最深点間で計測すれば、15m以内である可能性を指摘できよう。

上人ヶ平遺跡の低墳丘方形墓は、周溝内から形象埴輪をはじめ円筒埴輪などが出土している。低墳丘方形墓に埴輪が樹立された例は、南山城地域ではこの遺跡以外では確認されていない。これは隣接する埴輪窯との関連から樹立が比較的容易な状況であったと考えられるが、当地に埴輪窯が存在する要因については、周辺地域の歴史的環境との関連も十分考慮にいれなければならない。

埋葬主体部 芝山遺跡内で検出した低墳丘方形墓は総計4基であるが、埋葬主体部が残存するものは3号墳のみである。3号墳の主体部には、幅1.5m・長さ3.9mの掘形内に幅1m・長さ3mの組合式木棺が埋納されていた。棺内からの遺物はないが、北側棺外から須恵器の甕・高坏・蓋坏などが出土している。上人ヶ平7号墳の埋葬主体部は、幅1.6m・長さ2.6mを測る組合式木棺で、全体を白色粘土で被覆している。棺内から鉄剣・ガラス小玉が出土し、北側の副葬品埋納壕からは須恵器の把手付鉢、鉄鎌・刀子・鉋などの鉄製品が出土している。なお、上人ヶ平7号墳から出土した須恵器の把手付鉢は陶邑編年TK208前後に比定でき、8・14・15号墳からは周溝内ではあるが、おおむね同TK208前後に比定できる資料が出土している。これらの須恵器群は、当地周辺地域における古式須恵器のまとまった資料であり、須恵器導入の動態を考える上で重要であるとともに、低墳丘方形墓を築造した集団の性格を考える上で重要である。

築造時期 上述の2例によってのみ検討を加えることは、特殊例を一般化する危険性を



第3図 芝山遺跡古墳群実測図(6・7号墳が低墳丘円形墓)

含んでいるため、先述した研究略史を中心に私見を提示しておきたい。低墳丘方形墓が方形周溝墓の系譜を引いているところから、築造開始時期を古墳時代前期からとする寺沢・細川両氏の見解は支持すべきであるが、両氏の開始時期には約1世紀の違いがある。古墳時代は、定型化した大型の前方後円墳の出現をもって始まりとするが、その成立には、政治体制の確立が背景となっている。そして、前方後円墳の成立をもって造墓行為には政治的規制が行われ、墳墓の形態や規模は被葬者の階層を表現するようになる。しかし、低墳丘方形墓は、弥生時代以来の方形周溝墓の系譜を引いており、寺沢の指摘のように古墳時代初頭を開始時期と考えるべきであり、仮に、細川の指示する古墳時代前期後半に築造開始時期を認めると、時間的空白を設定せねばならず、造墓行為の中断を考える必要が生じてくる。これは単なる時間的空白の問題だけではなく、別系譜の造墓主体を設定しなければならなくなる。一方、低墳丘方形墓の下限年代については、方形区画墓の築造停止時期をもって7世紀前半代と寺沢は設定したが、古墳時代後期に入り徐々に進行したと考えられる集落首長などの中間首長層を政治的に再編成しようとする時期、つまり、後期群集墳の成立をもって低墳丘方形墓の築造が終了すると解釈しておきたい。この築造時期幅については、現在確認しうる南山城地域においても、首肯できる状況である。

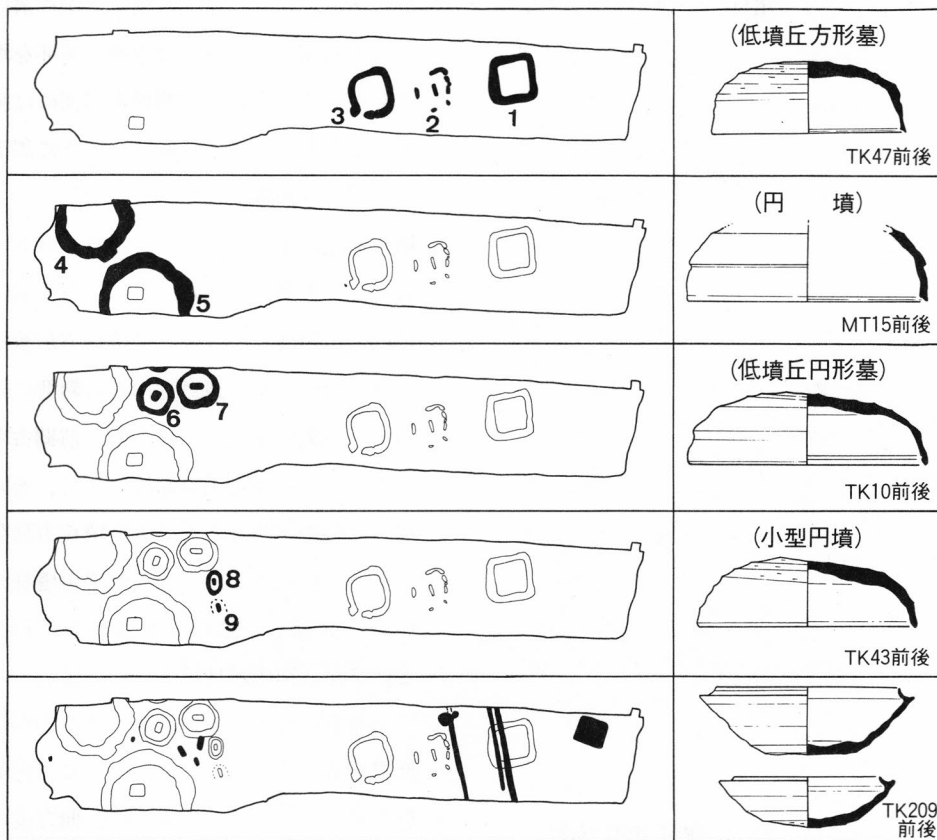
4 低墳丘方形墓とその被葬者

以上のように、低墳丘方形墓について具体的な調査例を提示しながら用語の規定を行ったが、上人ヶ平遺跡と芝山遺跡について、周辺の歴史的環境のなかでの低墳丘方形墓のもつ意義とその被葬者像について検討を行いたい。

上人ヶ平遺跡 本論集の遺跡概要に詳述されているので、この遺跡を周辺の考古学的調査成果を基に評価してみたい。上人ヶ平古墳群の北方には瓦谷古墳¹¹が所在し、埋葬主体部と墳丘の調査によって古墳時代前期後半の築造であることが判明している。埋葬主体部からは、碧玉製鏃形石製品・小札革綴冑・方形板革綴短甲・靱などの前期古墳の特徴的な遺物が出土している。また、瓦谷古墳の北方には、椿井大塚山古墳や平尾城山古墳があり、周囲に可耕地が狭小であることから在地勢力の自立的発展によって成立したとは考えられず、ヤマト政権中枢部からこの地に派遣された有力者の墳墓と考えられている。しかし、それら2基の出現以降の首長系譜をひく古墳は見られないのが現状である。先述した木津町瓦谷古墳は、出土遺物から4世紀後半と考えられているが、2基の前方後円墳の系譜を引くものではないことは、墳形や外表施設から指摘できる。瓦谷古墳の周辺には、一辺10mを測る低墳丘方形墓が確認されており、円筒埴輪棺も検出されている。その立地条件は、瓦谷古墳に隣接して築造されていることから瓦谷古墳に葬られた首長に従属し、職務を分

担し、時として補佐する人物の墓ではないかと想像できる。

一方、上人ヶ平5号墳は、瓦谷古墳より後出する帆立貝式の直径30mの古墳である。主体部の調査は行われていないが、墳丘の一部及び周溝の調査が行われ、普通円筒・朝顔形円筒埴輪以外に家形・衣笠形・盾形・鳥形・鶏形・馬形・靱形・人物形・甲冑形埴輪が出土し、葺石も確認されている。上人ヶ平古墳群の中で5号墳は、5世紀前半に位置付けられ、当該地域の首長として考えられる。この上人ヶ平5号墳を中心として低墳丘方形墓群が周辺に20基程度築造されており、主軸線方向や墳丘規模から3群に分類し編年されるに至っている。規模の比較的小さい低墳丘方形墓にも形象埴輪が出土しており、隣接する埴輪窯との関連が注目される。上人ヶ平遺跡や先述した瓦谷古墳群は、出土した衣笠形埴輪の存在から、南方に位置する佐紀盾列古墳群と深い結び付きが推定され、瓦谷古墳や上人ヶ平5号墳に見られる地域首長の配下にあつて、直接的に大首長に支配されない階層の墓が低墳丘方形墓であった可能性が指摘できる。小型の低墳丘方形墓にも埴輪が樹立されている事実は、埴輪樹立によって葬送ないし墓前祭が継承されたことを意味しており、低



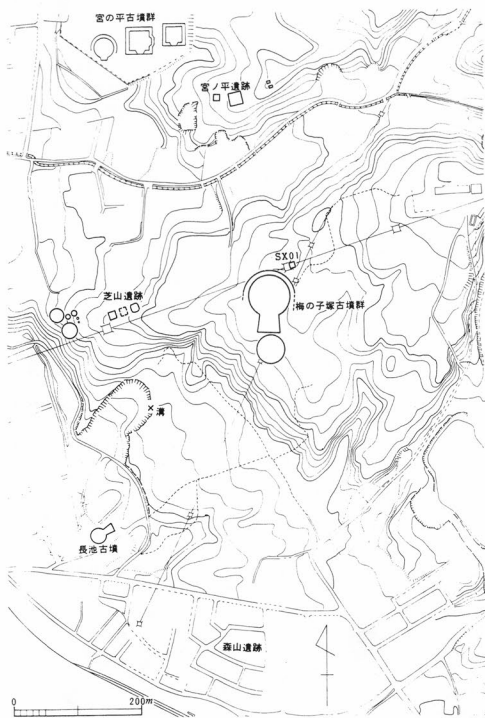
第4図 芝山遺跡遺構変遷図

墳丘方形墓を築造した集団は、5号墳と同一墓域内に築造を許可された集団であり、当該地域において一定の役割が分担された人物であったと解釈できる。なお、上人ヶ平6・7・8・14・15・18号墳から初期須恵器の副葬がみられることは低墳丘方形墓を築造した集団の性格の一端を表しているとも解釈できる。

芝山遺跡(第4・5図) 南山城地域でもっとも古墳の集中する城陽市久津川古墳群の南方約1kmに所在する複合遺跡である。遺跡地内には、保存状態の良好な前方後円墳である梅の子塚1号墳(全長80m)と円墳である梅の子塚2号墳(直径36m)が所在している。1号墳の埋葬主体部の調査¹²が行われ、盗掘による攪乱層から土師器・小型丸底壺の破片が僅かに出土した。その土器から概ね布留式中段階に比定できる前期古墳であることが判明している。芝山遺跡には、布留古段階から中段階に比定できる竪穴式住居址を確認しており、あるいは何らかの関連があるのかもしれない。

低墳丘方形墓は、第一次調査によって1基(SX01)¹³、第二次調査によって3基確認している。SX01は、一辺9mを測り、周溝内から陶邑編年TK23前後の須恵器が出土している。一方、1～3号墳は、一辺10mを測る低墳丘方形墓である。とくに、3号墳の北側周溝内

には壇状施設をもち、須恵器・蓋杯を埋納している。また、南側周溝隅部には陸橋部があり、それを挟み込むように周溝端にピットが穿たれている。おそらく、墳丘を区画するために木製樹物が樹立されていたと考えられる。なお、芝山遺跡地内では現時点で4基の低墳丘方形墓を確認しているが、遺跡地内の広範囲に分布する可能性が高いと言える。前期古墳である梅の子塚古墳群を核として、その周辺に時期が異なるものの低墳丘方形墓が築造されたことは、上人ヶ平古墳群の場合と共通した傾向であることがわかる。また、南山城地域において確認されている低墳丘方形墓は、芝ヶ原遺跡内の低墳丘方形墓群には、周辺に久津川古墳群が見られるといったように、前方後円墳と同じ墓域内に築造される場合が多い



第5図 芝山遺跡周辺遺跡分布図
(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第18集より)

傾向にあり、その立地条件は、地域首長の支配下に組み込まれ、伝統的な墓制を踏襲した集団であったことを物語っている。

5 ま と め

本稿は、京都府南山城地域に限定して低墳丘方形墓の動態について諸類例を提示し考えたが、検出例が僅少であり、特殊例を一般化し、その傾向を考えた部分も少なくなかった。しかし、研究抄史でも明らかのように比較的広い範囲に普遍的に見られることが徐々に理解されるようになってきている。低墳丘方形墓は、基本的には方形を意識して築造されており、弥生時代に盛行する方形周溝墓の系譜を引くものと解釈できることは本文でのべたが、細川が指摘するように部族連合中枢—地域首長—集落首長—集落一般構成員の重層関係が成立し、低墳丘方形墓がその中において解釈されるべきであるという見解は、広く一般化されるべきである。

南山城の低墳丘方形墓の立地は、前期に築造された前方後円墳と同一の墓域内に存在する傾向にあり、後期群集墳が墓域の贈与によって成立している点と異なっている。墳形と立地条件から勘案して、政権の中枢から直接的な支配を受けない共同体成員がその被葬者である可能性を指摘した。

南山城地域における古墳時代の研究は、大型前方後円墳である久津川車塚古墳とその周辺に所在する古墳群によって始まり、現時点ではほぼ全域にわたって様相が明らかになりつつある。これは、広い範囲にわたって開発が行われていることを示すものであるが、地表踏査では確認できない低墳丘方形墓が発見されたことは、当該地域の古墳時代を考えてゆく上で重要な発見であった。今後、発見例はさらに増加すると考えられるが、分布範囲や時期などを十分に検討し、用語の概念についても検証してゆく必要がある。

本稿作成にあたり都出比呂志先生をはじめ置田雅昭氏・和田晴吾氏・日野宏氏から有益な御教示を得た。文末ではあるが記して感謝の意を表したい。

(こいけ・ひろし=当センター)

- 1 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(『待兼山論叢』第22号 大阪大学文学部) 1988
- 2 都出比呂志「墳墓」(『日本考古学』4 集落と祭祀 岩波書店) 1986
- 3 寺沢薫「矢部遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49集 奈良県立橿原考古学研究所) 1985
- 4 細川修平「古式小古墳」素描(『史想』第21号 京都教育大学考古学研究会) 1988
- 5 長山雅一「長原古墳群の性格について」(『古代史論集 上』塙書房) 1988

- 6 田中和弘「古市古墳群における小古墳の検討」(『考古学研究』第32巻第4号 考古学研究会) 1986
- 7 和田晴吾「南山城の古墳—その概要と現状—」(『京都地域研究』Vol. 4 立命館大学人文科学研究所) 1988
- 8 小池寛「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要(1)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
石井清司・伊賀高弘・中井英策・八瀬正雄「木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要(1)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 9 小池寛「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 10 中村浩・近藤利由「下池田遺跡—第2次発掘調査報告—」(『大谷女子大学資料館報告書』第17冊 大谷女子大学資料館) 1987
- 11 伊賀高弘「京都府木津町瓦谷古墳の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第38号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 12 小泉裕司「梅の子塚古墳群の調査」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第20集 城陽市教育委員会) 1990
- 13 近藤義行「芝山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集 城陽市教育委員会) 1978